資料・翻訳

トマス・ホッブズ
『トゥーキューディデースの生涯と歴史』(下)

山　田　園　子　解説・翻訳

一　概説
二　「ウィリアム・キャヴェンディシュ卿への献辞」
三　「読者への序文」
四　『トゥーキューディデースの生涯と歴史』（承前）

四　『トゥーキューディデースの生涯と歴史』（承前）

［xviii］所領であるトラーキアの海岸で彼は隠居生活を送ったが、国への奉仕を避けられず、それが彼の後の不幸の種となった。というのは、彼がタソス島にいたときに、ラケダイモーン人ブラーシダースが、アンピポリスを占領したからである。アンピポリスはアテーナイの属領で、タソスとマケドニアの境界上にあり、タソスからは船で半日の距離にあった。この奪回のために、アテーナイ側の当地の将がトゥーキューディデースの元へ派遣され、挙兵するよう彼をせき立てた。なぜなら、トゥーキューディデースは指揮官の一人で、コモンウェルスのために、当該地域で挙兵する権限を持っていたからである(1)。彼はその通りにしたが、アンピポリスへ一夜遅れで向かい、す

（1）　編注：トゥーキューディデースはその頃は隠居生活をしておらず、毎年選出される十人の「指揮官」の一人だった。そしてもう一人の指揮官エウクレスと共に、タソスへ7艘の艦隊を送った。タソスはストリューモーン河口から船で半日足らずの島である。その駐屯地にトゥーキューディデースは任じられた。それは、おそらくは、スカプテー・ヒュレー〔ここでのつづりはScaptesyleとなっている〕の金鉱に負う彼の影響力の故だったろう。

でに当地は降伏してしまっていた。このため、怠慢から時宜を逸したか、敵を恐れてわざと引き伸ばしたかのように疑われ、彼は後に追放された。だが彼は、ブラーシダースの攻撃に備えエーイオーンの町にいて、アテーナイ人のためにそこを守っていたのであり、ブラーシダース軍は翌朝、アンピポリスからやって来て、エーイオーンを襲った。[xix] トゥーキューディデース追放の首謀者はクレオーンだったと考えられる。彼は当時の激烈な追従屋で、それゆえに彼の演説は人々の受けが大変よかった。不都合な事態が続くと、その事態の統率に見通しや勇気が欠けているわけではないのに、しかしながら、生じた出来事だけで物事を判断する人々には、中傷という方法が常に開かれており、公共善への熱意に見せかけて、羨望が非難のための根拠を簡単に見出すのである。

プルタルコスが書いたように、トゥーキューディデースは追放後、先に触れたトラーキアの町スカプテー・ヒュレーに住んだが、しかし遠出もし、戦争の残余の期間には戦闘現場に居合わせた。第五書において自身の言葉で明らかにするように、ここで彼は次のように語る。彼は両者の戦闘に居合わせた、つまりアテーナイ側に居合わせたのと同様、追放中だったのでペロポネーソス側にも居合わせた、と。この間に、彼は自分の歴史を、現在読める範囲で、完璧にしたのである。追放後に彼が再び自分の国へ戻ってきたかは、判然としない。彼がどこでいつ、そして何歳で没したのか、どの著者も詳らかにしない。彼が追放中に亡くなったことで、大半の者は一致している。だが、シケリアでの敗北後アテーナイは、ペイシストラトス家の者を除いて、追放された人物すべての刑の取消を宣言し、その折に彼は戻ってきて、後にアテーナイで殺された、と書いたものもあるようだ。だが、シケリアでの敗北「後」の語が「ずっと後」を意味するのでない限り、このこと〔大赦令発令、及びそれが彼の追放刑を解いたこと〕は到底事実ではありえない。大赦令はペロポネーソス戦争終結後のことだったからである(2)。トゥーキューディデース自身は帰還については何も触れず、だが第五書で明言するように、

全戦争を生き抜いた。彼が語るには、アンピポリスの任務後、20年間追放に処された。追放が始まったのは、この戦争の第8年目のことだった。戦争は全体として、まる27年間継続した[3]。他の箇所で彼は、ペイライエウス港とアテーナイ市の間の長い城壁の破壊に触れている。この破壊はこの戦争における最後の打撃だった[4]。トゥーキューディデースはアテーナイで死んだ、と言う人々は、アテーナイにある彼の墓碑からそういう推測をする。だが、これは充分な根拠にならない。というのも、彼は海外で亡くなったが、そこにこっそり埋葬されたか、(一部の者はそうだと書いている)、あるいは（別の者の主張によれば）墓碑はあっても、そこには埋葬されていないらしい。こうしたさまざまな［xx］推測の中で、パウサニアースが書いたことが一番もっともらしい。彼はアテーナイ市の墓碑について書き、「トゥーキューディデースのためにしたエノビウスの立派な行動は、確かに誉れあることだ」とし、トゥーキューディデースの像があったと言う。「エノビウスはトゥーキューディデースの帰還令を出したが、帰還中に背信行為に遭って殺された。彼の墓はメリティデスと呼ばれる市門の付近にある。」マルケリヌスによれば、トゥーキューディデースは57歳を越して亡くなった。また、ヘラニーコス、ヘーロドトスとトゥーキューディデースの年齢についてA・ゲリウスが書いたことが真実ならば、彼は68歳前に死んではいない。戦争が始まったときに彼が40歳であり、生きて戦争終結を見ていたとすれば（実際、確かにそうだった)、亡くなった時には、少なくとも68歳か、それを越しただろう。子供を残したかどうか判然としない。プラトンは『メノーン』で、高

(2)　訳注：アテーナイのシケリア遠征は紀元前415-413年のことであり、大赦令はペロポネーソス戦争後403年に出された。

(3)　訳注：ペロポネーソス戦争は431年から404年まで続き、トゥーキューディデースの追放は423年に始まる。

(4)　訳注：ペイライエウスはアテーナイの港であり、持久戦に備えて、市と港の間の通路は城壁によって守られていた。

貴な家柄のトゥーキューディデースなる者の息子、ミレシアスとステファヌスに触れる。だが、この子らはペリクレースの敵だったトゥーキューディデースの子、ということがはっきりしている。どちらのトゥーキューディデースもミレシアスという名を持ち、こちらのトゥーキューディデースもまたミルティアデース家の一員だったことを、プルタルコスがキモーンの伝記で証言している。彼〔歴史家のトゥーキューディデース〕に一人息子がいたことを、ポレモンを拠りどころにマルケリヌスが確かだとしているが、息子の名には何の言及もなく、ただ(不完全な複写上で)「θεο…」とある箇所を、ティモテウスと読む学者がいるだけである。トゥーキューディデースの人物についてはこのくらいにする。

さて彼の作品においては、二つのこと、すなわち「事実」と「修辞」が考慮されるべきである。というのも、「事実」に歴史の「魂」が、「修辞」に歴史の「体」が存在するからである。前者のない後者は歴史絵の一枚にすぎず、また後者のない前者は教導に不向きである。両者について我が著者がどのように取り組んだのか、見てみよう。この著者の歴史の信頼性について、そのことを未だかつて誰も問題としたことはなかったことを考えると、私には言うべきことがますますなくなる。また実際誰も、あの著者の真実性を疑うことなど正当にはできず、意図的に嘘をつくとか、怠慢にして事実でないものを示す、と疑わせるような事項は、彼にはまったく見出せなかった。彼は自身に過大な仕事を課さず、彼の時代よりずっと前の事項や、自分で情報を得ることができない事項の歴史を書くことはしなかった。彼は、[xxi] 自分がかかわる事実を見出すために必要なだけの手だてを、威光と富の両方の点において得られる人間だった。彼は、人間に可能な限りの努力を、(記憶に新しい間にあらゆる事項を書き留め、かつ情報収集に富を提供して)、事実の探究に注いだ。彼は聴衆人民の大喝采を他の誰よりも好まず、また現在の称賛を得るためにその時代の役に立つような歴史を書かず、来るべき時代を導くための記録として書いた。そのことを彼は自分で明言し、彼の本を

KTHMA EΣ AEI、「永遠の財産」と題した。卑屈な物書き屋が要する恐怖や追従には、彼は縁遠かった。そして、彼は自分の国に悪意を持っていたと考えられることもあったようだ。そのように彼を扱うことが、人々にはふさわしかったからなのだが、しかし、そういう感情を見出せるようなことは、何も彼は書かなかった。また、アテーナイ人として人々の不名誉になりそうなことは何も書かず、ただ「人民」として不名誉になりそうなことを書いただけであり、しかもそれは叙述の必要からであって、何か余談を求めてそうしたのではない。したがって、彼の言葉ではなく、人々自身の行動が自分達を非難することになる場合もあった。要するに、関連づけの仕方によって歴史の真実というものが明らかになるとすれば、そのことはこの歴史書において当てはまる。全叙述、そしてその各部分が皆、かくも一貫し、明快であり、かつ説得力を持つ。

「修辞」においては二つのこと、すなわち「配置」または「方法」、そして「文体」を考慮したい。ここでトゥーキューディデースが用いる「配置」について、この場では簡略に、次のことだけを見ておけば充分だろう。彼の第一書において、まず彼は序論の形で、ギリシア国をその揺籃時代から、彼が書き始めた時点における活況ある発展状態へと導き出し、次に彼は、彼が書こうとしていた戦争の実際の原因と、そう主張されている原因との両方を明示した。最後に戦争自体を扱い、そこでは一貫して時間の順序に、明白かつ純然と従う。出来事を年次で関連づけ、各年を夏冬に分ける。当該戦闘自体に先立って彼が書くのは、その戦闘の根拠と動機であり、それを叙述的に書くか、あるいはそうでければ、コモンウェルスで折々に影響力を行使した人物の「熟慮された演説」の形にまとめる。[xxii] 戦闘終了後、正当な折があれば、彼はそれらについて判断を下し、どんな手段で上首尾となったか、あるいはつまずいたかを明らかにする。教導用の余談、そして明らかに教訓用の他の話を（それは哲学者の役割だ）、彼は決して用いない。善い助言と悪い助言の方法や実例を人々の眼前にはっきりと提示するので、叙述それ自

体が知らぬ間に、かつ教訓で可能になる以上に、読者を効果的に教導するのである。

彼の「文体」については、古来の、かつ有能なさまざまの論者の判断に私はゆだねる。プルタルコスは彼の書『アテーナイ人の栄光』において、以下のようにトゥーキューディデースについて語る。「トゥーキューディデースは次のことを常に目的とした。彼の聴衆を観客にし、現場を目撃した者が抱くのと同じ情念へと、読者を投げ込むことである。いかにしてデーモステネースがピュロスの荒天の海岸でアテーナイ人を動かしたか、どうやってブラーシダースが舵手を励ましてガレー船を磯に乗り上げさせ、船から降りようと船上の梯子や足場へ行こうとしたか、いかにして彼は負傷し失神して、ガレー船の櫂受けに転落したか、いかにしてスパルタ人は海上においても陸上の戦闘のやり方にならって戦い、他方アテーナイ人は陸上でも海上の方法で戦ったか、さらに、シケリア戦争ではいかにして海と陸での戦いが、同等の運命をもって遂行されたか。こうしたことが、いわば、われわれの眼前での出来事のように描かれ、かつ明快に提示されるので、読者の心は、戦闘の現場に居合わせたかのような、それに劣らない感動を覚える。」このように彼の明快性が讃えられる。キケロは『弁論家』と題した書で、さまざまなギリシア人雄弁家の影響について語りつつ、次のように言う。「したがって、ヘーロドトスとトゥーキューディデースは一層称賛に値する人々である。というのも彼らは、先に私が名を挙げた人々と同じ時代に生きていたが」(トラシュマコス、ゴルギアスとテオドロスのこと)、「彼らはこの種の繊細さからほど遠く、むしろ実際に愚かだったからである。一方は〔ヘーロドトスは〕静かな川のように何のつまずきもなくさらさらと流れ、そして他方は」(トゥーキューディデースのこと)「より力強く走り、戦争であれば、実際そうであったかのように、進軍ラッパを吹き鳴らす。そして(テオフラストゥスが言うように)この二人において歴史は奮い立ち、彼らに先行する人達以上に写実的に、かつ光彩を伴って、思い切り語りかけてきた。」[xxiii] キケロ

の言は、トゥーキューディデースの言語の重みと威厳を称賛する。さらにキケロは第二の書『弁論家について』において、こう言う。「話術においてトゥーキューディデースは、私の見解では、彼らすべてをはるかに凌駕した。というのも、彼は中身がぎっしり詰まっていて、そのため、彼の文章数は彼の単語数にほぼ匹敵するからである。彼は非常に適切かつ厳密な単語を選ぶので、単語が文章をさらに説明しているのか、文章が単語を説明しているのか、どちらか言いがたい。」このように彼の文体の簡潔性と力強さが讃えられる。最後に、彼の文体の純正性と適宜性を讃えるものとして、ハリカルナッソスのディオニシオスを引用しよう。この点では、彼の証言にはなおさら強力なものがある。なぜならば、その能力や影響からしてディオニシオスは、そうせねばならぬ必要以上に人を誉めることなどしないであろう、そういうギリシア人雄弁家だったからである。彼の言は以下である。「他のすべてに勝って主要な、かつそれを欠けばその他の善も弁論において存在しない、雄弁の徳というものがある。それは何か？　言語が純正であり、ギリシア語の固有性を保持していることである。彼らは両方共、このことを謹直に守る。ヘーロドトスはイオニア語の、トゥーキューディデースはアッティカ語の最良の模範である。」こうした証言は、この歴史自体を読んだ者にとっては必要のない、まったく必要のないものであるが、修辞にたいそう骨を折り、かくも心血を注いだ当のディオニシオスが、その挙句に修辞の価値をおとしめてしまった、そういう証言である。さらに私は、トゥーキューディデースに対するディオニシオスの主な反論を取り上げ、かつそうした反論を、私自身の多くの言を弄さずに、読者の考察に委ねることが必要だと考える。まず、ディオニシオスは次のように言う。「歴史の執筆を意図する誰にあっても、その主にして最も必要な仕事は、気高い話題、かつその読者に喜んでもらえる話題を選ぶことだ。私見では、この点ではヘーロドトスの方がトゥーキューディデースよりも上手だった。なぜなら、ヘーロドトスはギリシア人と外国人の両方の歴史を結び付けて書き、忘却等から救ったからである。だが、

トゥーキューディデースはたった一つの戦争を書くだけであり、しかもそれは、名誉あることでも幸運なものでもなく、そんなものは決して起こらねばよかったと願われるような、さらには、子孫に決して記憶されたくも知られたくもない、そういうものだった。彼は縁起の悪い話題を取り上げ、序文で次のように語って、それをあからさまにする。『あの戦争で、[xxiv] 一部は外国人の手で、一部はギリシア人自身の手で、多くの都市が荒廃させられ、かつ完全に破壊されて、かつて類例がなかったほどに、多くの人々の追放と大量殺戮が生じた、等々。』こうなると、最初の部分だけで聴衆はぞっとして、それを嫌悪することになる。ギリシア人の哀れな恐ろしい惨禍について書くよりも、外国人とギリシア人両方のすばらしい行為を書くことの方が、今やどれほどに善いことだろう。そこからすれば、話題の選択においては、トゥーキューディデースよりもヘーロドトスの方が、ずっと賢明である。』

さて、誰にも考えてもらいたいことは、歴史を書く者の主にして最も必要な仕事は、彼の力量内でうまく処理でき、かつそれを読む子孫に有益な話題を選ぶことだ、と言う方がより理にかなってはいないか、ということである。この点で、万人の見解では、トゥーキューディデースの方がヘーロドトスよりも上手にやった。というのも、ヘーロドトスは、その真実を知ることが自身では不可能な事項について、そして心を真実で納得させるよりも、おとぎ話で耳を喜ばせるような事項について、執筆を企てたからである。トゥーキューディデースは一つの戦争だけを書くが、開始から終結までどのように進行したか、その戦争について彼は確実に知ることができた。その戦争で起きた苦難を序文で示すことで、彼はそれが大戦争であり、知られる価値があり、かつギリシア人に当時襲いかかった惨禍として子孫に隠されてはならず、人々は繁栄よりも逆境を注視することでより利を得るのだから、むしろ真実をもって彼らに伝えられるべきだ、と明言する。愉快な成功よりも苦難の方がどれほどよく人々を教導するかを思えば、自分の話題の選択においてヘーロドトスが賢明だった以上に、トゥーキューディデースの方が議論の的を射

ていた。

ディオニシオスはさらに次のように言う。「歴史を書く者の次の仕事は、どこで始め、どこで終わるかをわきまえることである。この点で、ヘーロドトスはトゥーキューディデースよりもずっと慎重だったように思われる。というのも、最初にヘーロドトスは、外国人がギリシア人を害し始めた原因を設定し、続けて、外国人に加えた罰と復讐で締めくくるからである。だがトゥーキューディデースはギリシア人の良好な状態から始める。それは、彼がギリシア人かつアテーナイ人であろうと、するべきことではなかった。また、[xxv] 彼はアテーナイ人の中でもあのように高貴な人だったから、あんなにあからさまに、戦争の責任を自分の国に負わせるべきでもなかった。戦争の責任を負わせてよさそうな事態は他にも充分あったのだから。また、彼はケルキューラ人の事で始めるべきでもなく、ペルシア戦争直後にあった、祖国のより気高い行動から書き始めるべきだった。そうした行動に彼は後になって適宜触れるが、ぞんざいで、そうすべきようには触れていない。彼が祖国を愛する者として多大な愛着を持ってあれら〔気高い行動〕を明らかにしたさいに、彼が書くべきだったことは、ラケダイモーン人が羨望と恐怖から、だが他の理由を装って、どうやって戦争を始めたかということであり、それからケルキューラの事やメガラ禁令、あるいは他に何であれ彼が書かねばならぬ事へと進むべきだった。さらに、彼の歴史書の締めくくりには多くの誤りがある。というのも、彼は全戦争に居合わせて、それを全部書こうとしたと言うのだが、キュノスセーマ岬の海上戦で終えており、それは本戦争の第21年目に戦われたものだからである。戦争を完全に書き抜いた方が、そして追放されたアテーナイ人がピュラからあっぱれにして喜ばしい帰還を遂げたことで、彼の歴史を終えた方がよかっただろう。このときにアテーナイ市はその自由を回復したのだから。」

これについて私は言っておこう。ペロポネーソス戦史の執筆に取り組んだ彼にとって、ギリシア人が当時善い状態にあろうと悪い状態にあろうと、そ

の原因に密着して叙述を開始することが自分の義務だった。そして戦争の原因となる問題がアテーナイ人に起因したものならば、著者がアテーナイ人であり祖国で敬われていたとしても、そうだと明言するべきであって、問題の責任を転嫁する何か他の事を、それが手近にあろうと、求めても取り上げてもならない。そして彼が書いたこの戦争の時代以前になされた行為については、それらの行為がいかに気高いものだったにせよ、簡略に触れるだけでよく、それに続く歴史に光を照らす役に立てばよかった。こうしてこれらの行為に彼が触れたとき、彼はどちらの側もひいきせず、祖国を愛する者としてではなく、真実を愛する者としてそうしたのであり、同様の公平さでもって後の歴史へと進むことになった。[xxvi] そして、彼が執筆を企てた戦争が終わったところで、執筆を終わらせた。それに続く時代がたとえどんなに称賛すべき、喜ばしいものになったとしても、あの時代を越えては自分の歴史を書かない。これがトゥーキューディデースが守ったすべてだった。

ハリカルナッソスのディオニシオスによるこれら二つの非難を、私は詳細に紹介し、ほとんど逐語的に翻訳したが、歴史の主にして重要な徳にかんして、彼の判断からより一層明らかになるものがあるだろう。私が思うに、かくも短い文章でかくも愚劣なことが書かれたことはなかった。彼は、彼以外にこの問題について語ったすべての人々の見解に、そして常識に逆らう。というのも、彼は歴史の課題を、真実を書くことで利をもたらすことにではなく、歌のように聴衆を喜ばせることに置くからである。歴史の話題として自国の惨禍や苦難を含む必要は、彼にはまったくなく、そうしたものは沈黙の中に葬っただろう。あるのはただ、祖国の光栄ある華麗な行為だけだ。歴史家の徳として彼が数え上げるのは、祖国愛であり、さらに、聴衆を喜ばせ、議論が人を導く以上のことを書き、そして祖国の名誉にならぬ全行動を隠す努力である。これは明々白々な悪徳だ。彼は修辞家だが、修辞的装飾に役立つ以外のことは、何も書かなかっただろう。だが同じ修辞家でもルキアノスは、『歴史はどう書かれるべきか』という論考で、次のように言う。「歴史家

は、執筆のさいには、国を持たない外国人になるべきであり、自分自身の法のみに従って生き、王に仕えず、人が何を好こうが嫌おうが気にとめずに、事物をあるがままに提示するべきだ。」

ディオニシオスが指摘する第三の欠陥はこうだ。トゥーキューディデースの歴史の方法は、それぞれの出来事の区切りよりも、時間に支配されていることである。というのも、生じた事を夏冬の順で彼は明らかにし、そのため包囲、反乱、戦闘、その他の行動の叙述を、時としてその出来事のさなかに放置して、同時に他の場所で起こった何か他の出来事の話に入り、時がそれを要すると再び前者にもどるよう強いられるからである。ディオニシオスが言うには、これは聴衆の心を混乱させ、その結果、歴史のさまざまな部分を明瞭に理解できなくさせてしまう。

［xxvii］ディオニシオスがここでも狙うのは、「目前の」聴衆を喜ばせることである。だがトゥーキューディデース自身は、自分の課題はそういうことではなく、「子孫のための永遠の財産」として自分の仕事を残すことだ、と言う。ならば、彼を完全に理解するに充分な余裕を持とう。だが実際には、いったん彼を注意深く読めば誰でも、他よりもこの方法によってこそ、どの行為についても明確に理解することになろう。そして、この方法の方がより自然である。彼の目的はペロポネーソス戦争一つを書くことだったから、この方法で彼は、その戦争のすべての部分を一体化した。その結果、全体にまとまりがあり、かつさまざまな叙述は、全体の部分としてのみ把握される。他の方法をとっていたなら、多くの小さな歴史を彼は縫い合せ、主題として自分が選んだペロポネーソス戦争を、いわば書かずに放置したことになっただろう。どの部分も、またその全部も、そうした表題〔ペロポネーソス戦史〕を、正当に担えたはずはなかったろうから。

第四に、ディオニシオスは第一書の方法ゆえに彼を非難した。そこでトゥーキューディデースは、ギリシアをその揺籃時代から彼の時代へと導き出し、戦争の真因を扱う前に、ケルキューラとポテイダイアにかかわる紛争の叙述

に着手したのである。戦争の真因は絶大なアテーナイ支配にあり、それはラケダイモーン人によって恐怖かつ羨望された。

これに答えて、私は次のように言う。ギリシアの古代の状態への言及は、彼は簡略に行ない、後の歴史の充分な理解に必要である以上にそれを力説しない。昔の時代についての一般的な認識がないと、当該歴史の多くの箇所を理解するのが容易でなくなるからである。それは、さまざまな都市や慣習の起源を知ることが元になるが、当該歴史自体に挿入されるべきものではまったくなく、しかし、あらかじめ知っていることが読者に想定されるべきもの、そうでなければ、必要な前置きとして最初に読者に明らかにされるべきものである。そして彼は、この戦争の公認かつ周知された原因を最初に、その後でこの戦争の真実かつ秘められた動機を叙述したのであり、そのことを非難するのは理に合わない。というのも、戦争自体と同様に、戦争の原因として公表かつ公認されたものが、それがいかに軽微なものであろうと、歴史家の課業の内にあることは明白だからである。口実がなければ、戦争は起きない。この口実となるものは常に、被った損害、または被ったと称される損害である。[xxviii] 他方、他国の偉大さへの羨望や来るべき損害への恐怖といった、敵対に至る秘められた動機は憶測的なものにすぎず、証拠を伴わないが、それに注意する義務が歴史家には常にある。さて戦争の主要な原因として、公言された損害か、あるいは秘められた羨望か、歴史の優秀な執筆者ならどちらを扱うべきか、誰かに判断してもらおう。せんじ詰めれば、この点でトゥーキューディデースが用いた方法を描くとこうなる。「ケルキューラにかかわる紛争はこう経過し、そしてポテイダイアにかかわる紛争はこう経過し」、両者を大局的に関連づけると、「アテーナイ人はその両者に損害を与えたと非難された。だが、ラケダイモーン人は、こうした損害ゆえにアテーナイ人との戦争に及んだのではなく、彼らの絶大な権力を羨望し、彼らの野心が結果するものを恐れた。」私が思うに、これ以上に明白かつ自然な叙述の整理を工夫することは、不可能だったろう。

再びディオニシオスは言う。トゥーキューディデースは弔辞を（葬送演説は、戦時を通して、あらゆる機会に厳粛に行なわれた）、レイティと呼ばれる小川で殺された15人の騎士のために書いた。しかも、この理由でのみ、ペリクレースの代わりに、弔辞を書いたのだろう。こうなると、ペリクレースは当時〔15人の戦死時〕は生きていたが、他の同様の〔戦死者を出す〕出来事が起こる前には、死んでいたことになる(5)。

アテーナイ人の風習では、どんな戦争であれ、最初に殺された者達が、アテーナイ市郊外での厳粛な葬儀に与ることになっていた。この戦争中も多くの機会に、アテーナイ人はこの慣習に従った。したがって、その慣習や形態を周知させることは妥当だったし、一回限りの葬儀という、その風習は常に不変だったのである。当時埋葬された者が何人あろうと、ただしそれは、ディオニシオスが言うほどに少数だったはずはないが、最初の〔戦死という〕出来事に立ってそれを述べることが、最も妥当なことだった。葬儀は戦死後の冬になるまでは執行されなかったので、厳粛な行事の前に殺された人はもっと大勢いたが、そうした人々も皆、最初の戦死者と見なされる。しかも、ペリクレースは弔辞演説の任務を遂行し、ディオニシオスがそれに疑いをかけるような理由は何もない。

ディオニシオスのさらなる非難は次である。メーロス島の住民との対話で、トゥーキューディデースはアテーナイの将軍のことを紹介するが、それはその島への侵略の大義を、[xxix] そしてアテーナイの国の権力と意志を公然と主張するためである。そして島民の大義の公平性にかんしては、島民とのいかなる論争に入ることも完全に拒否した。そんな論争は、トゥーキューデ

(5)　訳注：続くホッブズの反論から考えると、トゥーキューディデースが最初の15人の戦死者だけに触れ、その後の戦死者には触れていないことを、ディオニシオスは非難した。しかも、弔辞がペリクレースの代筆であるなら、多くの戦死者を出した後の葬儀執行時点では、ペリクレースは死んでいたことになる、とディオニシオスはこじつける。

ィデースによれば、国の威信に反するのだった。

これに答えよう。これらの将軍のやり方は、他のさまざまな行動に類似しないものではない。アテーナイの人々は公然と彼らに仕事を任せたのであり、したがって十中八九、そのように事を進めるよう将軍は許されていた。あらゆる手段でもってこの島を乗取るという任務を、アテーナイの人々が彼らの将に負わせたのであれば、島民の大義の公平性をアテーナイ人にまず報告することは権限外であり、それが大いに真実だろうと思われるし、私が見るところ、任務を果たすべきか否かをめぐって、将軍が島民との論争に入らねばならぬ理由はない。問題は、公正な手段か汚い手段か、どちらで任務を遂行するかということだけであり、それがこの対話において論じられるべき要点である。この歴史の方法や順序づけについて、彼は他にも難癖をつけるが、それに答える必要はない。

ディオニシオスはトゥーキューディデースの文章に対し、曖昧かつ恣意的だと際限なくあちこち難癖をつける。彼が非難するあれこれの箇所を見ようとする者は、その気があるなら、ディオニシオス自身を読んでみたらいい。該当箇所に相当するその内容はひどく冗長だ。確かにトゥーキューディデースには、幾分長い文章があるだろうが、注意深い者には曖昧ではなく、この他にそうした文章はほとんどない。だが、これがディオニシオスが見出す最も重大な欠陥なのだ。さらに、曖昧だということは、人間の情念にかんする熟考を含んだ文章の奥深さに由来する。そうした情念は、見ないふりをされ、あるいは通常の議論が加えられずにいたが、しかし、公的な交わりにおいては人々に最大の影響力を発揮する。相当な熟考なしには人間を見抜くことが誰にもできないならば、初めての会話だけで人を理解できるなどと、われわれは期待すべきでない。マルケリヌスによれば、トゥーキューディデースは意図的に曖昧にしたから、普通の人は彼を理解できないだろう、と言う。考えられないことではない。賢人がこうと書けば(万人に理解される言葉でそうしても)、彼を称賛できるのは賢人だけだろう。だが、この曖昧さは、生

起した事項の叙述において、また場所や戦闘の記述においてあるべきでなく、先に引用した箇所でプルタルコスが証したように、そうした点ではすべて、トゥーキューディデースは大変明快である。[xxx] だが、人間の気質や行動様式の特質においては、かつそれらを重大な出来事に当てはめるさいには、人がどんな言葉で心を伝えようとしても、通常の能力の持ち主にとっては、曖昧でないことの方が不可能である。したがって、もし彼の演説において、または反逆の、もしくはその種の他の出来事の記述において、トゥーキューディデースが容易に理解されないのであれば、それは、表現が込み入っているから生じるのではなく、そうした事項の性質を見抜けない人々のせいである。ディオニシオスはさらに、単語に単語を対置させるトゥーキューディデースの方法を非難する。これは、修辞家が「対照法」と呼ぶもので(6)、ある種の話法では大変な欠陥となるが、性格を現わすさいには不適切なものではなく、比較をするような議論のさいには、ほとんど唯一の文体である。

彼はさらに、トゥーキューディデースが名詞を動詞に、動詞を名詞に、また性、格、数を恣意的に変更することを非難する。トゥーキューディデースは彼の文体の効果を高めるために時々そうするが、文法違反ではない。ディオニシオスはマルケリヌスの答えに委ねておこう。彼はこう言う。「ディオニシオスはこのことを非難するが、無知同然であり」（しかし、彼は修辞の専門家だ）「これは最も卓越し、最も完全な話法である。」

どんな動機でディオニシオスは彼の価値をおとしめねばならなかったのか、知りたいと願う者がおそらくいるだろう。トゥーキューディデースについて、かつて執筆した全歴史家をはるかに凌駕する最高の者だと万人から評価されてきたこと、また古代の演説家や哲学者のすべてによって、歴史を書くさいの尺度や準則として受けとめられてきたことを、ディオニシオス自身

（6）　訳注：対照法は二つの語句を並べて表現効果を高める方法で、例えば、針小棒大、月とすっぽん、といった表現法がそれになる。

が認める。どんな動機がそこにあったか、私には分からない。だが、こうすることでどんな栄誉を彼が期待したかは容易に分かる。彼はまず、同郷のハリカルナッソス出身のヘーロドトスをトゥーキューディデースよりも好み、ヘーロドトスは最高とみなされた。そして、自分自身の歴史はヘーロドトスのそれに劣るとは、多分考えられないだろうと思いこみ、こういう計算の結果、彼は最高の歴史家という名誉が自身に下ると見た。万人の見解では、そこで彼は誤算したのである。ハリカルナッソスのディオニシオスの反論についてはこのくらいにする。

トゥーキューディデースの歴史について自身で8回も書いたのは、著名な弁論家デーモステネースである。[xxxi] それほどにトゥーキューディデースのこの書はよく評価され、その雄弁さえ称賛された。だが、この彼の雄弁というのは、法廷に適したものではまったくなく、歴史に適したものであり、聞かれるよりはむしろ読まれるべきものである。休みなく通り抜けていく言葉は(公けの演説の場合にはそうなる)、楽々と理解されるべきものでなければならず、そうでなければ聞き逃される。だが読者の熟考用に書いて残された言葉は、むしろ力強く充溢していなければならない。したがって、キケロがトゥーキューディデースを弁論家の部類から区別したことは正当であって、しかし同時に、トゥーキューディデースの本領を彼は常に歴史に置く。(『弁論家について』第二書)「トゥーキューディデースに何らかの借りを負っているどんな偉大な修辞家がいるだろうか?万人が彼を称賛するが、実のところ、それは生じた出来事を彼が賢明に、真剣に、おごそかに語るからであって、法廷訴訟の演説家ではなく、歴史における戦争の報告者にふさわしいものである。そのため、彼は弁論家として認められたことはなかった。また、彼が歴史を書かなければ、名誉ある高貴な人として、その名は残らなかっただろう。偉大な演説家の誰も、彼の言葉や文章の重厚さを真似しない。しかし、不様で支離滅裂なたわ言を口走ったときには、すぐさま自分をトゥーキューディデースの兄弟とみなすのである。」再びキケロは彼の書『最良

の弁論家について』で、こう語る。「だが、ここでトゥーキューディデースが立ち上がるだろう。彼の雄弁は、一部の人々によって、正当にも賛嘆されている。しかし、彼の雄弁は、われわれが求める弁論家にとっては何の価値もない。というのも、叙述という方法によって物事を明らかにすることと、議論によって人を告発する、または人の疑いをはらすこととは、別だからである。叙述においては、聴衆を静めるものもあれば、駆り立てるものもある。」ルキアノスはその書『歴史はどう書かれるべきか』で、彼が歴史家に求める徳を、トゥーキューディデースによって絶えず例示する。そして、彼のその書全体をよく考える者であれば、ここにあるこの歴史が提供する像こそが、ルキアノスの心に前もって抱かれ、彼の書が提供する全教訓を彼に思いつかせた当のものだ、ということを明確に読み取るだろう。最後に、トゥーキューディデースへの最も真実かつ適切な称賛を、ユストゥス・リプシウスから聞くことにしよう。彼の書『社会の原理について』への注において、次の言葉がある。「トゥーキューディデースは、多くのことを書いたわけでも、非常な大事件を書いたのでもないが、多くの大事件を書いたすべての者達から、多分、勝利の栄冠を勝ち取っただろう。どこにおいても、叙述は重厚で、[xxxii] 簡潔にして内容が濃く、判断においては健全である。どんな箇所も、人の生き方や行動をそれとなく教示かつ指導する。彼の演説や余論においては、ほとんど人間離れしている。トゥーキューディデースを読めば読むほど、夢中になり、読み終えても必ずまた読みたくなる。彼に次ぐ者はポリビウスである、等々。」

トゥーキューディデースの人生と歴史についてはこのくらいにしておく。